歳から赤ちゃん産んで、赤ちゃんはみんな大人まで育つし母ちゃんは毎年妊娠出産。

4～5年で30匹の群れが60匹くらいになっちゃう。

大歓迎のメッセージは知らん顔

サルってね、視力は人間と同じで夜は見えない。

昼間行動するから、人と出会うことが多い。

サルも他のドーブツと同じで安心して食える所に住みたい。

村に出て来て遭遇した第一村人が知らん顔で無視したり、「アッ、サルだ！」「エッどこどこ、あーホントだ」なんて見ながら何もしないで通りすぎるというのはサルに対して「やあ、よく来たね、この村は怖くないから安心して餌探しなさい」っていう大歓迎のメッセージ。

本紙でたびたび紹介する島根県の三郷町の婦人会の母ちゃん、ばあちゃんたちに最初の勉強会であたしは言った。

私「村の中で空き家の庭のカキ食ってるサル見ながら、あそこのカキならサルが食ってもいいやって思いながらみてたことある人手を挙げて！」

おばちゃんたち全員手をあげた。

私「はい、皆さん全員、サルを村に餌付けした犯人です」

一番元気なHさん「ほんじゃあどげんしたらよかったん？」

私「田畑であろうが道端であろうがタンポポの葉っぱ一枚でも食わせたら餌付けです、とにかくサルの姿みたらロケット花火とか棒とか石とかで追い払って下さい。誰かがサルを追ってるのを見たら必ず加勢して一緒に追い払って下さい」

Hさん「サルに出会うた時に花火も棒も石もない時はどげえしたらええ？」

私「その時は下駄でも靴でも５００円玉でも投げつける！」

Hさん「サルは群れでおるけど下駄は2発でおわりなんじゃがなあ・・もごもご・・・、何も畑荒らしとらん、ただ歩いとるだけのサルに花火撃ったり石投げるのは虐待とか言われんかなあ？」

追い払いこそ、サルの保護

過剰な追い払いは虐待ではないのかと心配する必要はない。

サルの群れは固有の食文化を持つ。

人に慣れ、穀類、野菜や果樹への依存度が高まった群れはドングリやひもじい時はヒサカキの実、落葉樹の冬芽で飢えをしのぐといった山の食文化をどんどん失っていく。

野生のサルを農作物でしか生きられない堕落した群れにしてはいけないから、人里は来るところじゃないぞと心を鬼にして追い払って下さいな。

アッ、コロナおさまったら曲集落で追い払い練習すっからね。

【表】人÷４＝サルの寿命なんだけど…

	人　間	エ　サ	初産	出産間隔	乳児死亡率	群れの頭数
山のサル	恐　い	冬は食べていくのが精一杯	６歳～８歳	2年～3年に1回	30%～50%	なかなか増えられない
里のサル	だんだん慣れる	一年中ごちそう食い放題	４歳～５歳	毎　年	10%以下	どんどん増える

講師紹介 **井上（いのうえ） 雅央（まさてる） 氏**

1949年、奈良県出身。
愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了、京都大学博士（農学）。
元 農研機構 近畿中国四国農業研究センター 鳥獣害研究チーム長。
退職後、同センター専門員。宮崎県、熊本県、広島県、静岡県などでアドバイザーとして継続的に活動。
著書に、『これならできる獣害対策』『山の畑をサルから守る』『山と田畑をシカから守る』『60歳からの防除作業便利帳』『ハダニ』『女性がすればずんずん進む獣害対策』（いずれも農文協）など多数。